

# Haemophilia 日本語版

## Vol. 4 No. 2 の編集に当たって



担当編集委員

三間屋 純一

静岡県立こども病院血液腫瘍科

最近、重症急性呼吸器症候群（Severe Acute Respiratory Syndrome ; SARS）や西ナイルウイルス感染症（WNV）が社会的に注目を浴び、その対策が急務となっている。香港および中国広東省で多発しているSARSの原因ウイルスはコロナウイルスの亜型であることがごく最近になり判明したが、その感染経路は未だ確定されておらず治療法も確立していない。もし、免疫不全状態にあるHIV感染血友病患者が感染した場合には重症化することが容易に推測される。一方、WNV感染症の原因ウイルスはフラビウイルス属で、1999年初頭に確認され、ヒトにおいても髄膜炎や脳炎というかたちで流行し、2002年米国各地で大流行した。CDCはWNVが輸血を介して伝播するという強力な証拠を提示している。実際に、WNV感染したドナーの血液を輸血された患者や臓器移植を受けた患者でWNV陽性が認められている。幸いにもこのウイルスは血漿分画製剤の製造工程で行われている熱処理やSD処理により容易に不活化されることが実証されており、血漿を原料とする血漿分画製剤の安全性は担保されている。しかしながら、新たなウイルスの出現は血友病患者とその家族に大きな不安を与えている。

本号では、プリオン病の血液感染に関する論文を取り上げた。凝固因子製剤などの血液製剤は安全と考えられているが、血液を介した新変異型CJDの伝播リスクに関しては未だ十分なデータが得られていないのが不安材料である。「止血：実験室からベッドサイドへ（基礎から臨床へ）」（P. 23）では2002年1月にロンドンで開かれた血友病専門医の会議内容が紹介されている。非常に興味ある最新の情報が満載されている。基礎と臨床の橋渡しがいかに重要であるかが容易に理解できるので、一読をお勧めする。インヒビターの治療薬であるバイパス複合体製剤FEIBA®の安全性、特に血栓症のリスクについての論文（P. 34）が紹介されており、結論としてリスク因子を念頭におき、過剰投与を避けることにより、安全に使用できることが強調されている。今後は、活性型第VII因子製剤とのすみわけを考慮すべきであろう。また、興味ある論文として2001年のGlobal Surveyの調査結果が報告されており、発展途上国における血友病治療戦略を促進する上で今回の調査は重要なデータを提供しており、WHOは今後も継

続すべきとしている。

以上3編のフル翻訳に加え、本号では血友病関節障害の診断におけるMRIの有用性、HCV感染に対するインターフェロンとリバビリン併用効果、第XI因子インヒビター症例におけるrFVIIa製剤の使用経験、rFVIIa製剤の持続投与方法の評価、HIV非感染血友病患者の死亡要因および血友病B孤発家系の遺伝子診断の意義に関する論文等7編の抄録を取載しており、いずれも読み応えのあるものばかりである。是非とも原著をお読みになることをお勧めする。